仁田義雄『副詞的表現の諸相』東京　くろしお出版　2002.　v+325pp.

水　野　江依子

1．はじめに

近年、英語を中心とした印欧系言語に関する副詞の体系化した包括的かつ理論的な研究はかなり進められてきており、様々な提案がなされている（cf. Alexiadou（1997），Cinque（1999），Ernst（2002），Haumann（2007）等）。一方、日本語の副詞研究は文法研究と称しながらも個別的な語彙論的記述に留まる傾向が見られ、かなり立ち遅れていると言えよう。本書は、命題の内部で働く日本語の副詞に焦点をあて、その修飾成分の観点から詳細な記述・分析を試みたものであり、日本語の副詞を体系的に研究したいという研究者にとっては有用な入門書であると考えられる。以下、本稿では各章の内容を概観して考察を加える。さらに本書での分析が、Mizuno（2003）で行われた英語における動詞の意味分析に基づく副詞の下位分類化と共通している点を指摘し、日本語の副詞も意味分析に基づく副詞の認可のもと、理論的な分析が可能になるのではないかということを示唆する。

2．概要

本書は全体で八つの章で構成されている。第一章は本書全体のイントロダクションに相当し、従来の日本語の副詞研究の問題点を述べている。その後、第二章、第三章で本書で取り扱う副詞的修飾成分とは何か、また本書で扱う五つの副詞（結果の副詞、様態の副詞、程度量の副詞、時間関係の副詞、頻度の副詞）の大枠を述べており、第四章から第八章までをそれぞれの詳細な議論に充てている。以下、本書の議論の中心となる第四章から第八章までの内容について少し詳しく見ていくことにする。

まず第四章では（1）に見られる結果の副詞について考察されている。

（1） a. 今度のは、丸々と肥えた、いっそう大きな奴だ、・・・

b. この個体は、体を二つに割ったり、体の一部から芽を出したりして、・・・ (p. 46-47)

結果の副詞は（1a）のように自動詞にも（1b）のように他動詞にも係ることができる。結果副詞は動きの実現のされ方を表すものであるということで「(おまんじゅうを）パッと割ったとき」のような様態副詞と共通性を有してはいるが、様態副詞が動きの『展開過程の局面』をとりあげているのに対して、結果の副詞は動きが実現した『結果の局面』を取り上げているという点で大きく異なると分析している。さらにこの分析によって結果副詞の共起できる動詞が「刻ム、汚ス、描ク、曲ゲル、冷メル、染マル」など、対象あるいは主体に状態変化が引き起こされるといった結果の局面をもつ対象／主体変化動詞に限られ、「遊ブ、走ル、泣ク」などといった結果の局面をもたない主体運動動詞とは共起できないという言語事実が自然の帰結として導かれると述べている。

第五章は、（2）に見られる様態の副詞とその周辺的なタイプの副詞について論じている。

（2） a. ゆっくりと鬼貫は手帳をとじた。

b. 水槽をうっかり蹴とばして、水を少しこぼしてしまった。 (p.75)

様態の副詞の特徴を示すために、「しばしば」や「たまに」といった頻度の副詞との比較をしている。後者は「空襲警報がしばしば鳴った」というのが概略「{空襲警報ガ鳴ッタコト} ガシバシバダ」と表せることからも分かるように、事態生起の頻度・回数といった事態の外側から事態の成立のあり方を特徴づけたものであるのに対し、前者は文の表している事態の内側から、事態に内在している諸側面の一つを取り上げ、その有り様に言及している。事態の内部から事態の成立のあり方や成立状況について限定や特徴づけを行うという点では「ずっと廊下で見張りをしていた」のような時間関係の副詞も同じであるが、時間関係の副詞は、事態がその中で存在するところの外枠である時間的なあり方、という外在・外延的なものへの言及であるという点で異なっていると述べている。このように、様態副詞の特徴を示した上で、様態副詞を「動き様態の副詞」と「主体状態の副詞」(p.80) に分類し、意味的特性によってそれらをさらに詳細に下位分類化し数多くの具体的事例

を挙げ論じている。

第六章では、（3）に見られる程度の副詞と量の副詞について論じている。

（3） a. 草木は季節によって非常に違う。 (p.149)

b. お酒を相当飲んだ。 (p.163)

著者はこれらの副詞を「程度量の副詞」とひとまとめにし、それを文法的な働き方や共起する述語のタイプから、「純粋程度の副詞」「量程度の副詞」「量の副詞」という3つのタイプに下位分類化した。純粋程度の副詞とは、「ヒジョウニ、タイソウ」などのように一般的には形容詞に係り、その属性・状態の程度性を限定するものであり、その性質上、共起できる動詞は程度性を有する状態動詞となる。量程度の副詞とは、「ケッコウ、チョット」などのように、程度性の度合いを指定し限定するものである。量の副詞に属するものとして「タクサン、ドッサリ、フンダンニ」などが挙げられている。これらの中心的用法は主体や対象の個体の数量限定となる。動詞との関係で言えば、「自然ノ恵ミヲタップリト味ワウ」というように味わうという動きの量限定を行っている。以上の用法について、著者は詳細に具体例を挙げて論じているが、ただし、著者自身も指摘しているように（p.145)、このような下位分類化はすでに多くの先行研究において示されており目新しい提案ではない。

第七章は時を表す副詞類を、（4a）のような事態の外的な時間的位置づけを表す「時の状況成分」と（4b）のような動きや状態に内在している時間的側面のその時間的ありように言及することによって動きや状態という事態のあり方を限定し特徴付ける「時間関係の副詞」に下位分類化している。

（4） a. あしたあたり須崎のほうにご一緒しませんか。 (p.204)

b. その笛を明夫が譲り受けて、中学でずっと使った。 (p.230)

著者は前者を発話時などいくつかの時点との関連性を基準にしてさらに下位分類した。後者については事態存続の時間量、時間の中における事態の進展、起動の時間量といった基準で下位分類化し具体的に論じている。時を現す副詞類は命題の内部で働く副詞類ではあるが、これまで挙げた副詞類とは異なり動詞それ自体の意味成分ではなく、事態の示す「時」が副詞が関連する成分となっている。

第八章は、（5）に見られる「頻度の副詞」をとりあげている。

（5） a. コロンブスの卵のたとえもあるとおり、真に正しい解答と

は、しばしば馬鹿らしいほど単純なものである。

b. 室内はふたたび真っ暗になった。 (p.259)

頻度の副詞が、「結果の副詞」「様態の副詞」「程度量の副詞」「時間関係の副詞」と決定的に異なる点は、後者が事態に内在的に存在している側面をとりあげそのありように言及するものであるのに対し、頻度の副詞は事態の外側から事態の成立のありようや成立状況を限定し特徴づけるものであるという点である。この点で「時の状況成分」と類似しているが、ただし時の状況成分は頻度の副詞の限定・特徴付けを受けた事態に対してそれが生じた時間位置を表すことができるということで両者は異なっていると考えている。

3. 問題点

本書は、これまであまり論じられてこなかった命題内部を修飾する日本語の副詞について、豊富な具体的事例を用いて詳細に分析することによってそれぞれの意味クラスの根底に流れる意味の共通性を示している。この点で日本語の副詞の研究を志す者にとって大変有用な入門書であることは間違いないであろう。

しかしながら、いくつか問題点はある。第一に、『従来の副詞的修飾成分への研究が、文法研究と称しながらも、個別的な語彙論的色彩の強いものに傾くことが少なくなかった』(p.2) と先行研究を批判してはいるものの、特に最近の印欧系言語における副詞研究と比較してみた場合、語彙論的記述の域を超えていないように思われる。これはおそらく、各意味クラスの副詞に大枠の関連性を持たせ体系的に示そうとしながらも、分類化の過程で個々の副詞に言及していくに従って着目する意味や機能が異なってしまう — 各意味クラスごとに分類の基準が異なる — ことに起因するのではないかと思われる。その結果、従来の日本語の副詞の研究と変わらぬ個々の副詞の意味の記述に留まってしまったのではないだろうか。

第二に、『その意味や統語的な機能を、文の意味－統語構造と関連させながら、分析・記述することを試みる』(p.2) と述べているが、本書の中で統語構造との関連性について体系的に述べている箇所は殆ど見られない。わずかに (6) で示したように副詞によっての作用域が示された箇所もあるが、その作用域がさらに統語構造にどのような影響を与えていくのかについては

全く論じられていない。[1]

（6） a. ［頻度の副詞［程度の副詞］］ (p.288)

b. ［時の状況成分［頻度の副詞［時間関係の副詞［様態の副詞］］］］ (p.41)

これをもって統語構造と関連させて論じた、というのは少々強引であろう。さらに一歩進んだ統語構造との関連性への言及が望まれる。

4．提言

3節で本書の問題点について指摘したが、一方で、本書の研究はもう一歩深い洞察を加えることによって今後の副詞研究に日本語の観点から大きな貢献を与えるのではないかという期待を持たせるものではある。例えば英語を含む印欧語の副詞の分析においては、副詞が修飾するということを意味的に関連する機能範疇によって認可されることであるとされている（cf. Alexiadou（1997），Cinque（1999）等）。日本語の副詞についても同様に認可の観点から統一的に統語構造との関連性から説明ができるのではないだろうか。それが可能となれば日英語の副詞の平行性からさらに副詞の本質に迫ることができると考える。

そのひとつの可能性を示唆する研究としてMizuno（2003）の研究があるということを指摘する。Mizuno（2003）では、英語の動詞の意味分析を行いそれが（7）の統語的階層構造をもつと仮定した。

（7） [$_{vP}$ DO [$_{vP}$ BECOME [$_{VP}$ PREDICATE]]]

VP副詞は動詞全体を修飾するのではなく、動詞の意味成分のひとつを修飾している－認可される－のだと提案した。[2] この提案によって、VP副詞の動詞との共起関係や統語的振る舞いなどが自然の帰結として説明できた。仁田の観察によれば、日本語の結果副詞は結果の局面を修飾するため、自動詞の場合は主体変化動詞と共起し他動詞の場合は対象変化動詞と共起すると提案している。（7）の意味分析の観点からみれば、両者ともある動作の結果ある状態になったということで、結果副詞はBECOMEに認可される副詞であると主張することが可能であろう。同様に様態副詞は動作のありようを修飾するということで、意味成分のDOと関連付けることが可能であろう。さらに、Mizuno（1999）では頻度の副詞については（8）で示したよ

うに動詞の上位に生成されるASP(ect) に認可されるとしているが、この分析が日本語の頻度の副詞に当てはまると仮定すれば、(6b) であげた頻度の副詞が様態副詞に対して作用域をもつということが統語構造の中で説明可能となってくる。

(8) [$_{AspP}$ ASP [$_{vP}$ DO [$_{vP}$ BECOME [$_{VP}$ PREDICATE]]]]

このような視点のもとでは、結果の副詞、様態の副詞、頻度の副詞を統一的にかつ統語構造と関連させて説明することが可能になるであろう。

ここでの提案は時を表す副詞をどのように扱うかを含め、今後詳細な分析が必要となってくるが、この方向性で今後の研究が進められることによって、近年盛んとなっている副詞の研究に対して日本語の事例から理論的貢献をすることが可能になってくると思われる。

5. 結語

本書は、従来の日本語の副詞の研究であまり論じられていなかった命題内部で働く副詞について豊富なデータを示しながらそれぞれの意味クラスを体系的に論じている。3節で指摘したように語彙論的記述に重きが置かれ、統語構造との関連性に対する分析が不十分であるという印象は否めないが、4節で論じたようにここでの豊富なデータと綿密な記述的分析は、今後、日本語の副詞研究を諸言語と比較し、理論的な分析を進めていくにあたって重要な示唆を与える一冊であることは間違いないだろう。

注

(1) (6b) の作用域を示す例として (i) が挙げられている。

(i) あの頃は、私はしばしば私だけの場所でしばし のんびりと自分の疲れを癒した。

(2) 例えばDOは*intentionally*を認可し、BECOMEは*slowly*などを認可する。

参考文献

Alexiadou, Artemis (1997) *Adverb Placement: A Case Study in Antisymmetric Syntax*, John Benjamins, Amsterdam.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic*

Perspective, Oxford University Press, Oxford.
Ernst, Thomas (2002) *The Syntax of Adjuncts*, Cambridge University Press, Cambridge.
Haumann, Dagmar (2007) *Adverb Licensing and Clause Structure in English*, John Benjamins, Amsterdam.
Mizuno, Eiko (1999) "On the LF-movement of Adverbs," *English Linguistics* 16, 303-328.
Mizuno, Eiko (2003) "On the Licensing of VP Adverbs," *Studies in English Literature* 44, 41-68.